
[8] 山陰

鋤柄俊夫

①……………因幡・伯耆(鳥取)

食 膳 具

基本的にロクロ成形の土師器杯・皿を軸としており、中世Ⅰ期までは一部で須恵器杯が、Ⅱ・Ⅴ期は手捏ねの京都型皿がみられる。古代後Ⅲ期は、伯耆国庁のⅢ群(10世紀前半)の資料に代表される〔倉吉市教育委員会1976〕。前代より続く高台付きの土師器杯Bは、体部の直線的なもの以外に碗形態をとるものがあり、法量が減少し体部の開く無高台の土師器杯Aと併行関係にあるとされる。また同様な資料は長瀬高浜遺跡SF76・倉吉打塚遺跡方形墳墓でもみられる〔橋本1993〕。

中世Ⅰ期の資料は、八頭郡郡家町に所在する山田10号窯の須恵器杯があげられる〔郡家町教育委員会1987〕。器形は高台の有無で分けられ、前者は体部下半が内彎し、後者についても体部の直線的なもの以外に内彎して立ち上がるものが見られる。高台付きの製品については東海で見られる山茶碗との類似が考えられ、熱残留磁気の年代も1090年を中心とした数値を示している。

中世Ⅱ期は鳥取市菖蒲遺跡のSK01が見られる〔鳥取市教育福祉振興会1994〕。長径3m近い不整楕円の土坑であり、炭化物と共に土器を多量に出土している。構成はロクロ成形で口径8cmの土師器皿が37点、口径14.4cmで体部の外上方に開いた土師器杯が15点、土師器鍋が3点、ⅡまたはⅣ類の白磁碗が1点である。鍋は外面がタテハケ・内面がヨコハケであり、短い口縁部を外折させた形態を呈する。白磁碗より時期は12世紀を中心とした位置におかれる。また倉吉市宮ノ下遺跡・広瀬廃寺からは同時期の手捏ね京都型皿が出土している〔橋本1993〕。

中世Ⅲ期は倉吉市福本家ノ上古墓〔倉吉市教育委員会1993a〕・大日寺遺跡〔倉吉市教育委員会1993b〕、淀江町小波原遺跡〔淀江町教育委員会1992〕などで13～14世紀代と思われる資料が出土しているが、詳細な時期は不明である。大日寺遺跡の溝状遺構出土の土師器皿・杯をみると、杯は口径と底径の差がひろがり、体部は緩やかに内彎しながら斜め上方へ開く。皿は底部が回転糸切りで口縁部は短く開く。なお寺内廃寺〔鹿野町教育委員会1979〕の墓Ⅱからは、Ⅲ期前半の備前窯とロクロ成形の土師器皿、土師器脚付皿が出土している。

中世Ⅴ期は城館を中心として、体部の開いたロクロ成形皿および京都型手捏ね皿が目立つ。倉吉市山名氏館跡推定地〔倉吉市教育委員会1993〕からは、包含層および遺構から土師器皿が出土している。器高の高い杯形をみれば、基本的にロクロ成形により、口径の大きな体部の大きく開いた製品を見ることができる。底部内面の調整から2類に分けられるが、他に京都のⅣ～Ⅴ期に比定され

図1 因幡・伯耆

る手捏ねと思われる皿も2点みられる。なお小皿には灯明皿として使用されたもの、内面に墨の付着したものがある。

他に米子城跡〔米子市教育文化事業団1993〕・大熊段遺跡(墓)〔鳥取県教育文化財団1986〕・天神山遺跡〔鳥取県教育委員会1982〕・前田遺跡〔河原町教育委員会1983〕・秋里遺跡⁽¹⁾〔鳥取県教育福祉振興会1994〕〔鳥取県教育文化財団1990〕からロクロ成形皿以外に手捏ね皿が、羽衣石城址〔東郷町教育委員会1993〕からロクロ成形皿が出土している。

煮炊具

土師器鍋と瓦器釜・鍋から構成される。中世Ⅰ期以前の状況は不明である。中世Ⅱ期は小波原遺跡が知られる。溝1から土師器鍋が出土している。京都型。

堀1から陶器四耳壺・青磁合子・青磁皿と共に土師器鍋、瓦器鍋・釜・播鉢が出土している。土師器・瓦器鍋は、胴部が直立して口縁部が受け部状を呈するものと、丸底で口縁部の受け部状の屈曲が弱いものに分けられ、前者は京都型の影響を、後者は古代以来の土師器甕に続く系譜を想定させる。瓦器釜は京都型と播磨Ⅳ期の製品に類似した形態に分けられる。布施遺跡の例とあわせて当該製品が伯耆地域のより独自の特徴を示すものと考えられる。この堀は小波城と考えられており、文献では元弘の頃の記載がある。

また福本家ノ上古墓でも瓦質焼成の鍋が古墓などから出土している。頸部から口縁部が受け部状を呈するもので、口縁部上端面のナデが強く、断面は凹縁状を呈し、前代の土師器鍋の口縁部形態に類似する。時期は古墓の群の五輪塔から鎌倉時代と推定されている。他に福岡遺跡からも土師器鍋が出土〔鳥取県教育文化財団1992〕している。

中世Ⅲ期は布施遺跡〔鳥取県教育文化財団1981〕で瓦質焼成の鍋・釜・播鉢がみられる。鍋・釜はいずれも池状遺構から出土し、その構成は京都型の鍋・釜と口縁部の内傾する形態の製品からなっている。

このうち後者の器形は、讃岐・阿波でⅤ期にみられる製品に類似するが、共伴する他資料と時期が合わないため、播磨系あるいは足釜と考えた方がよいかもしれない。なお、同遺跡より箸・漆碗・挿り目の無い瓦器播鉢の出土も知られている。また大日寺遺跡でも同時期と思われる瓦質焼成の釜と鍋がみられる。鍋は内外面にハケ調整がみられず、ナデおよび指押さえが行われている。口縁部は受け部状を呈するものの、「L」字状の屈曲は弱く、外折した口縁部の内面がナデにより凹縁状に仕上げられ、同様に上端面も強いナデにより縁帯の強調された形態を呈する。釜は口縁部が内傾するもので、短い鑊が付けられている。

中世Ⅴ期は天神山遺跡の資料の中にみられる。構成は手捏ね皿、箸、漆器碗、瓦器釜1、鍋6で鍋が多い。鍋・釜共に京都型の範疇に含まれ、体部は外傾し、受け部の屈曲はU字状に変化するため、Ⅳ期はその前段階の形態を推定することができよう。なお、秋里遺跡からはⅡ～Ⅴ期におよぶ資料をみることができ、縦耳の石鍋、足釜も出土している。また米子城からは瓦器播鉢も出土している。

ⅡからⅢ期の間に変化期がみられそうである。食膳具は杯形主流から皿形主流への転換があり、煮炊具では古代以来の丸胴型で口縁部がL字を呈する鍋が、釜と受け部状口縁のいわゆる京都でみられるような形態に転化する。また土師器京都型皿が大熊段遺跡では墓の供献品としてみられる

がこの状況がその機能に意味をもつものかどうか興味深いところである。

②……………出雲・石見(島根)

広江耕史により整理がおこなわれている〔広江・片岡1988〕〔広江1992〕。基本的にロクロ成形の土師器杯による。

古代後Ⅲ期は池の奥2号墳周溝内および大坪3号墳の資料がみられ、器種は無高台杯・高台杯・高高台杯から構成される。無高台杯は須恵器杯の器形に近く、器高が高く口径と底径の差の少ないものであるが、体部は中位で屈曲または彎曲する。高台杯は体部の内彎した、いわゆる碗形態を呈し、特に大坪3号墳の資料は灰釉陶器碗に対比されると言う。高高台杯は体部上半が外反してのびるもので、東日本と共通する器形である。時期は前者が11世紀、後者が10世紀前半に考えられている。

中世Ⅰ期は石台遺跡・古市遺跡があげられる。無高台の杯は器高を減じ、体部中位の屈曲が著しくなる。高高台杯についても同様な傾向がうかがわれ、杯部の皿化が進む。またこの時期疑似(柱状)高台の皿もみられる。

Ⅱ期は西石橋遺跡・的場遺跡・天満谷SD01を代表とする。的場遺跡の土壙墓からは同安窯系青磁碗が出土しており、13世紀代の年代がおかれる。土師器杯は底部外面に回転糸切り痕を残し、体部は緩やかに内彎し、端部を外反ぎみに仕上げる。天満谷遺跡SD01からは、土師器疑似高台皿、体部の開いた土師器杯および高台付き杯、白磁碗・四耳壺など12世紀を中心とする資料が出土し、なかでも土師器杯は同時期の播磨系須恵器碗の器形に対比される。なお同時期の他遺跡としては、松江市出雲国庁址・国分寺址・国分尼寺・石台遺跡、斐川町西石橋遺跡、三刀屋町京殿遺跡、太田市笹川遺跡、浜田市石見町国府跡があり、西石橋遺跡からは墓と推定される土壙から土師器碗・皿、鉄刀が出土し、12世紀後半～13世紀初頭の時期が推定されている。

Ⅲ期は黒田畦遺跡・京殿遺跡がみられる。土師器杯は器高および、口径と底径の差を減じ、体部外面に稜をもつ。

Ⅳ期は上久々茂土居跡・大峠遺跡〔島根県教育委員会1994〕でⅣ・Ⅴ期の中国陶磁器をはじめとし、器高が減少し、大きく外に開く形の土師器杯が知られる。

Ⅴ期を代表する遺跡は富田城および富田河床遺跡の土師器皿〔島根県教育委員会1984〕と出雲市小山遺跡出土の土師器皿〔岡崎1992〕である。前者は京都型の手捏ね皿が多いのに対し、後者は京都型を意識した底部ヘラ切りの在地産の皿である。いずれも大きく開く体部を特徴としている。

なお、川原和人・桑原真治らにより斐川町西石橋遺跡の資料をもとにした10～14世紀の大綱がまとめられている〔川原・桑原1987〕。

次に煮炊具についてみると、12世紀を中心とした時期では石台遺跡で土師器鍋がみられる。彎曲して外上方へ立ち上がる体部と外折する口縁部から構成され、口縁部は受け部状にやや屈曲している。内外面ともに丁寧なハケ調整が行われる。ついで天満谷SB03の西側石列からは土師器鍋が2点出土している。底部は丸みを帯び、直線的な体部と受け部状だが屈曲の緩やかな口縁部からなる。口縁はヨコナデ、体部は外面が縦位の、内面が横位のハケ調整である。Ⅳ・Ⅴ期は上久々茂土居跡

図2 出雲・石見

をはじめとする城館跡を代表とする。鍋は体部が外斜し、口縁部の屈曲がほとんど退化した防長系の瓦器鍋・足鍋が出土している。

以上よりまとめれば、食膳具にみられる画期は中世ⅠからⅡ期の段階およびⅣからⅤ期の段階にあり、前者は高台付き形の消滅、後者は杯形から皿形への転換で表現される。

煮炊具は天満谷遺跡の一部の資料にあるような、口縁部を「L」形に屈曲させた鍋も存在するところから、古代に遡及する土師器甕の存在を想定することもできるが、中世Ⅱ・Ⅲ期を中心として、土師質焼成ではあるが京都的な受け部状口縁の鍋を軸としており、そこには、日本海側に共通する傾向を看取することができるものと言えよう。

なお天満谷遺跡は、他に常滑窯甕・三筋壺、瀬戸窯四耳壺、山茶碗なども出土しており、同遺跡が広範な交易の手段をもっていた環境をうかがうことができる。

また他に、茶釜は益田市三宅御土居跡から、石鍋は浜田市下府廃寺、古市遺跡、鰐石遺跡、鹿足郡六日市町九郎原Ⅱ遺跡、出雲市大槻古墳、松江市夫敷遺跡などでみられる。

一方木製品は、タテチョウ遺跡〔島根県教育委員会1992〕から平安時代の木器椀・皿が出土。内外面ともに黒色化されており、一部で漆と思われる黒色付着物も認められている。

註

(1)——〔鳥取市教育福祉振興会1994〕ではB-I区の 紀)、曲物が、B-II区からは縦耳の石鍋、B-III区の SE07から常滑窯甕(13世紀)、土師器京都型皿(16世 SK15からは土師器鍋、足釜などが出土している。

引用・参考文献

- 岡崎雄二郎 1992 「出雲市・小山遺跡出土の備前壺」〔松江考古〕第8号
 川原和人・桑原真治 1987 「島根県斐川町西石橋遺跡の中世墓」〔古文化談叢〕第18集
 河原町教育委員会 1983 「前田遺跡発掘調査報告書」
 倉吉市教育委員会 1976 「伯耆国庁跡発掘調査概報(第4次)」
 倉吉市教育委員会 1993 「福本家ノ上古墓発掘調査報告書」
 倉吉市教育委員会 1993 「大日寺遺跡群発掘調査報告書」
 倉吉市教育委員会 1993 「山名氏館跡推定地発掘調査報告書」
 郡家町教育委員会 1987 「山田窯跡群〈久谷地区の調査〉」
 鹿野町教育委員会 1979 「寺内廃寺発掘調査概報」Ⅱ
 島根県教育委員会 1983 「島根県埋蔵文化財調査報告書」第X集
 島根県教育委員会 1984 「富田川」ほか
 島根県教育委員会 1987 「北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書」
 島根県教育委員会 1992 「タテチョウ遺跡発掘調査報告書」Ⅳ
 島根県教育委員会 1994 「上久々茂土居跡・大峠遺跡」
 東郷町教育委員会 1993 「羽衣石城址」
 鳥取県教育文化財団 1981 「布施遺跡発掘調査報告書」
 鳥取県教育文化財団 1986 「大熊段遺跡」
 鳥取県教育文化財団 1990 「秋里遺跡」
 鳥取県教育文化財団 1992 「福岡遺跡」
 鳥取市教育委員会 1982 「帆城遺跡・天神山遺跡調査報告書」
 鳥取市教育福祉振興会 1994 「葛蒲遺跡」
 鳥取市教育福祉振興会 1994 「秋里遺跡発掘調査概要報告書」
 橋本久和 1993 「山陰の古代・中世土器概観」〔中世土器研究〕第68号
 広江耕史 1992 「島根県における中世土器について」〔松江考古〕第8号(池ノ奥2号墳・大坪3号墳・石台遺跡・古市遺跡・的場遺跡・西石橋遺跡・黒田畦遺跡・京殿遺跡)
 広江耕史・片岡詩子 1988 「島根県における古代末～中世にかけての須恵器について」〔中近世土器の基礎研究〕Ⅳ

米子市教育文化事業団 1993 『米子城跡』 I
淀江町教育委員会 1992 『小波原遺跡発掘調査報告書』

挿図文献

因幡・伯耆

- ①倉吉町教育委員会 1976 『伯耆国庁跡発掘調査概報（第4次）』
- ②郡家町教育委員会 1987 『山田窯跡群〈久谷地区の調査〉』
- ③淀江町教育委員会 1992 『小波原遺跡発掘調査報告書』
- ④倉吉市教育委員会 1993 『福本家ノ上古墓発掘調査報告書』
- ⑤(財)鳥取市教育福祉振興会 1994 『菖蒲遺跡』
- ⑥鳥取市教育委員会 1995 『中世土器研究会資料』
- ⑦倉吉市教育委員会 1993 『大日寺遺跡群発掘調査報告書』
- ⑧(財)鳥取県教育文化財団 1981 『布施遺跡発掘調査報告書』
- ⑨倉吉市教育委員会 1993 『山名氏館跡推定地発掘調査報告書』
- ⑩鳥取市教育委員会 1982 『帆城遺跡・天神山遺跡調査報告』
- ⑪東郷町教育委員会 1993 『羽衣石城址』
- ⑫米子市教育文化事業団 1993 『米子城跡』 I

出雲・石見

- ①広江耕史 1992 「鳥根県における中世土器について」『松江考古』第8号
- ②鳥根県教育委員会 1983 『鳥根県埋蔵文化財調査報告書』第X集
- ③鳥根県教育委員会 1987 『北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
- ④鳥根県教育委員会 1994 『上久々茂土居跡・大峠遺跡』
- ⑤岡崎雄二郎 1992 「出雲市・小山遺跡出土の備前壺」『松江考古』第8号
- ⑥鳥根県教育委員会 1984 『富田川』ほか